

第1回くまもと未来会議 議事録

日 時:平成24年5月27日(日) 15:00~17:00

場 所:ホテル日航熊本 5階 天草

テーマ:州都

出席者:五百旗頭 真 委員 (公立大学法人熊本県立大学 理事長)

小野 友道 委員 (熊本保健科学大学 学長)

田川 憲生 委員 (熊本商工会議所会頭)

坂東 眞理子 委員 (昭和女子大学 学長)

蒲島 郁夫 議長 (熊本県知事)

【事務局】

それでは、ただ今より州都をテーマとしました「第1回くまもと未来会議」を開催いたします。私は、会議の事務局を担当しております、熊本県企画振興部企画課の坂本と申します。よろしくお願いいたします。

はじめに、本日御出席の委員の皆様をご紹介させていただきます。

公立大学法人熊本県立大学 理事長 五百旗頭 真 委員

熊本保健科学大学 学長 小野 友道 委員

熊本商工会議所 会頭 田川 憲生 委員

昭和女子大学 学長 坂東 眞理子 委員

それではこれより、議長が会議の進行を行います。蒲島知事、よろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

皆さん、こんにちは。今から州都をテーマとした、「くまもと未来会議」を開催したいと思います。今日はたくさんの傍聴の方々がいらっしゃいます。お忙しい中、足を運んでいただき、誠にありがとうございます。

私は2期目を迎えました。1期目の目標は「熊本県民の幸福量を最大化する」こと。そして2期目は、その幸福を実感できる熊本にしたいということで、4つの目標を掲げています。1番目は「活力を創る」、2番目は「アジアとつながる」、3番目が「安心を実現する」、4番目が「100年の礎を築く」です。この4つの目標のために、今2期目を迎え全力で走っているところであります。この中の「100年の礎を築く」とは、将来の熊本を見据えてどう動くかということでもあります。今、熊本は新幹線の全線開業、熊本市の政令市移行という、ホップステップという流れの中にあって、飛躍の絶好のチャンスを迎えております。その先のホップステップジャンプとして、道州制となった暁には熊本を州都にしたいと思っております。

私は、いずれ道州制は実現するものと思っておりますが、そのときに州都について考えるのは遅すぎる、今から考えておくことが大事ではないかと思い、今回の未来会議のテーマの一つとし

て州都を選びました。私は、熊本が道州制の中で果たすべき役割は大変大きいと考えております。九州全体の効率性からみますと、地理的に中央にある熊本がハブ機能を果たすべきであり、また、経済の福岡、そして政治の熊本という役割分担が、一極集中のリスクを回避する一つの方法ではないかなと思っております。福岡はニューヨーク、そして熊本はワシントンD. C. を目指す。そういうふうな考えで、この州都を今考えております。

州都というと、まだ先のような話になりますが、私は政治というのは期待ではないかと思っております。経済もそうでありまして、期待で経済は動きます。实体经济よりも、この期待で動くということが重要でありますので、この州都構想を始めることによって、熊本への期待が集まり、また人が集まり、そして投資が増える。そしてアジアとのつながりも増えていく。そしてより品格のある、活力ある県へとレベルアップするということが考えられます。そういう意味で、今、この州都構想をするのは、期待を高めるという意味でも、とても重要な意味があると思っております。

ただ、熊本だけが良くなるという考え方ではなくて、熊本が九州全体に何ができるか、どれだけ貢献できるかということが大事ではないかと思っております。そういう意味で、バレーボールのセッター役で九州全体にトスを上げるような、そのような熊本の役割を見据えた上でのこの州都構想でなければいけないと思っております。

この会議は、州都構想の議論をしていただく、大変ふさわしい方々に集まっていたいております。今日も、多彩な議論が展開されると思っておりますが、さまざまな観点から州都構想を皆さんと共にやっていきたいと思っております。そして、この会議から州都を目指した議論が県全体に広がり、全ての県民と一緒に、州都という目標を共有して、その目標を達成する喜びを共に感じたいと思っております。

以上、長くなりましたけれども、州都をテーマとした、この「くまもと未来会議」の目的について、述べさせていただきます。

それでは、意見交換に入りたいと思いますが、会議の進め方としましては、1巡目に州都についての一般的な観点からお話をいただいたのち、2巡目に、具体的に熊本の話についてというような流れで進めたいと思います。本日お配りしております参考資料をご覧くださいと思いますが、まず、諸外国の例などを通して、委員の皆さまが考えておられる州都とは何だろうか、また州都にふさわしい要素は何だろうか、あるいは選ばれる条件などについて、できればご意見をいただきたいと思っております。ただ、これは拘束するものではありませんので、自由にご意見をいただいても構いません。

まずは、五百旗頭さんの方から、時計回りで一人10分ぐらいの時間をお願いしたいと思います。

【五百旗頭委員】

ありがとうございます。蒲島知事の未来会議に出席するようにとのことでしたので参上しましたが、こんなに多くの人の視線にさらされるものと心の準備をせずに来たものですから、いささか驚いております。

九州の人口、GDP(国内総生産)は、大体オランダに匹敵するものです。これは、すごい話だと思います。オランダというのは、それほど大きい大国というのではないけれども、非常に個性のある、誇り高いヨーロッパの主要国の一つですね。実は、九州が同じだけのものであり、ヨーロッパの一国並という基盤を九州は持っているわけです。

オランダの人たちは、長い歴史の中で培ってきたものに非常に誇りを持っております。あの海面の低いところを干拓してしっかりと堤防を作っています。今度のような津波があつたら大変でしょうけれども、幸い割と安定した気候でもあります。そして、その中で築いてきたもの、自分たちでなければできないことがあるというふうに、非常に誇りを高く持っているんですね。例えば、国際法の分野では、オランダが世界をリードしているのだというのが、彼らのご自慢であります。

国際司法裁判所というのがあるのをご存じかと思いますが、もし、周辺国が同意したら、日本は、尖閣諸島の領有権であれ、竹島であれ、北方領土であれ、そこに出すでしょうね。そうすると、司法裁判所が世界の知性を集めていますので、そこで妥当な線は何かということをお勧めしてくれるでしょう。世界の中で、そういうユニークな役割を果たす機関がハーグですね。私が何年か前に行ったら、日本人の外務事務次官を経験した小和田恒(おわだひさし)さんが黒い法衣を着て、厳かにやってらっしゃいました。仕事が終わった後、案内してもらいました。「こここそが、国際法の面では世界の拠点なんだよ」と。

司法裁判所だけではなく、私もこの間まで、蒲島知事に命ぜられるまでは防衛大学校長だったのですが、防衛大学校長としてもハーグは大事なのです。どうしてかといいますと、化学兵器禁止条約機構というのがそこにあるんです。これは割と新しいもので、オランダは司法裁判所があるだけではなく、新しい国際条約ができたときに、手を挙げてそれを誘致するんですね。ホストするわけです。これは何かといえば、ABC兵器。いずれも使われると極めて悲惨である。その中で化学兵器については、心ある国は使わないことにしようという国際的な合意を作って、それを実施し、監視し、論点を提示していくために、化学兵器禁止条約機構というのがハーグに置かれているんですね。そこに防大のOBが数名行って働いています。会ってみると、非常にピチピチしてるんですね。日本人は国際性がなくて、内向きで苦手というふうなことが一般に言われますが、傾向としてそうかもしれないけど、そうではない人もいっぱいいるんですね。蒲島知事がその一番の例ですけども、35年前にハーバードで初めて会ったときに、他の日本人と全然違って、アメリカの大地を一人で踏みしめて自分を築いてきた人です。そういう人がおられる。

防大の卒業生でも、応用化学とか理工系の勉強をして、そして化学兵器に造詣をもって、そこで働いている。日本人の多くの人のように、しおらしく遠慮がちにやっているのかと思っていたら、結構自信满满でやっているんですね。そこで、その防衛大学のOBたちに聞きました。「あなた方はどうしてそんなに自信を持って、リーダーシップを取るようなことができるのか。その要件は何か。防大時代に化学のことをよく勉強したからなのか。それとも英語が上手だからか。何なんだ」と聞いたら、「いや、そういうものではありません。防大精神です」と言うんですね。防大校長が「防大精神とは何だ」と聞いたんですけれども、彼らが言うには、「持ち場を捨てるな、という防大精神です」と。

防大は、8人部屋で合宿する。24時間一緒に住んで、縦横斜めでみんなで関与するのです。ごまかしがきかないんですね。それで、困ったことがあったときに逃げるということをやりだしたら、とめどなく逃げなければいけない、とめどなくごまかさなければいけなくなるのです。そんなことをしても無駄だから、逃げたくなったら前向きに逃げろ、真正面から立ち向かい、しっかりとその問題に対処する姿勢を持ってやっていけば必ず道はあるのだ、というのが防大で叩き込まれた精神だと言うんですね。その精神を持って国際機関でやっていたら、みんなに信頼されるようになってきたと言うんです。ともあれ、日本もそういう中で、小和田さんにせよ、防大OBにせよ活躍しているのはありがたいですが、オランダという九州ほどの小さな国が、そういうふうはこの分野ではという誇るべきものを持っている。社会文化全般に非常に誇りを持っています。

それから商業、産業の面でも、見るべきものがあります。防大校長として、新しい兵器レオポルド戦車というのはドイツの戦車だとみんな思っていますが、オランダへ行くと、あれはドイツとオランダの共同制作のものなのだと、世界最高水準のものを作っているのだと言います。物量では、オランダはたいしたことはできないけれども、やっぱり技術面では我々が世界をリードしているという誇りを持っています。つまりポイントは、一つの国が大をなし得るかどうか。それには私は3つぐらい要件があると思います。1番目は素材です。今言ったように国際法で強いとか、レオポルド戦車を作るようなノウハウ、技術能力を持っているとか、人々の教育水準が高いとか、労働生産性が高いとか、いろいろなパーツがあります。パーツがないと無理です。勝負強いバッターも、先発できるピッチャーもないチームでは優勝できないでしょう。けれども、それがあっても、もっと劣らず大事なものを、それは国民的気風みたいなものです。チームで言えば、チームの気風です。これがあるかないかで持っているパーツの総和が2倍になったり、半分になったりします。これは我々日常的に分かっていることだと思います。気風が非常に大事なのですが、その点日本はちょっと問題があります。我々はもう少子高齢化になってしまって、衰退するのが宿命だというようなことをメディアがいうと、なんとなくみんなそんな気分になってうなだれている面があります。オランダほどの国でも胸を張っている。日本は全体でみると、大国です。ヨーロッパには日本ほどの大国はないわけです。フランス、ドイツ、イギリスといっても日本の半分の規模です。ドイツはもうちょっとありますけれど、内容水準も高いわけですから、自分たちの強みです。それに自信を持っていく。威張れとはいいませんが、穏やかな自信を持って進んでいく、やれることはいくらでもあるというふうな気風が非常に大事です。熊本に来て嬉しいのは、熊本の人たちが非常に愛郷心を持っています。郷土愛ともいいます。この地をしっかり支えたいという思いがあり、その上に立って蒲島知事がこういう提案をしたりしている。そのパーツが大事であり、気風が大事であり、もう一つ大事なものは何かと言えば、リーダーシップです。最後は監督がばかだつたりすると優勝できないですね。チームがみんなと一緒にやってやるんだというふう燃え立っていても、ばかな選手交代をやって勝機を失うようではだめです。そういう意味で、この九州というのがいわば一つの国である。日本という全体でみたら、連邦国家の中の一国であるというほどの志を持ってやっていく。九州ほどその条件のあるところはない。そして熊本は極めて重要な地にあるというので、この研究会を非常に楽しみにしているところです。

【蒲島議長】

小野先生、お願いします。

【小野委員】

私も州都のイメージをお話させていただきたいと思います。私は三十数年前に、アメリカのオレゴンのポートランドというところに留学しておりました。そのとき、帰るまでずっとポートランドシティが州都だと思っていました。何だったかは忘れましたが、州都のことが必要になりまして仲間に聞いたら、「ポートランドは州都であるはずがない。セイラムという小さな一都市だ。」と。今でも、十何万人くらいだと思っていますけど、そんなところですよ。三十数年前ですから、ITの機器などが発達していないころでした。それでもそうでしたので、私の研究の仲間の一人になぜかと聞きましたら、「こんなにぎやかな街にそんな州都があったら大変なことになる。」と教えてくれた人がいました。先ほど蒲島知事が、ワシントンとニューヨークのお話をしておりましたが、まさにオレゴンみたいな田舎でも、そういうふうに、州都はどちらかというところにあるという。それがなぜかなというのでずっと残っております。

州都のイメージで、一番大切なのは、例えば九州の全体に危機管理能力がちゃんとできる都市であることが一番だろうと思います。蒲島知事の「安全、安心」ではありませんけれども、やはり危機管理能力がないと州都の立場はないと思います。そういう意味から言いますと、今はITの時代ですから、どんなにへき地のところでもかまわないと思うのです。いずれにしても、危機管理能力があって、人的資材だとか食糧だとか、そういう生きるためのいろんなものが、九州全土に、瞬時とまでは言いませんけれども、少なくとも2時間以内に届くような場所を供給できる場所があれば、それは、僕は田舎であれば田舎であるほどいいと思っています。後でまたお話する機会がありますが、人口密度があまり高すぎますと、例えば一番危険な感染症が発生したときに、行政だとか医療機関はもう何もできないことになります。そういうことであっては困ります。少し矛盾はするんですけども、いろんな会議だとか、いろんな催しで一挙に人を集めて、それを受け入れるキャパシティーも必要だと思っています。そんなイメージを州都として描いております。それが熊本市がいいのか、あるいはもっと田舎がいいのか、あるいはにぎやかなところがいいのか、今から議論が始まると思うのですが、私の州都のイメージはそういうことでもあります。今からいろんなお話をさせてもらいますけれども、州都の機能としては、危機管理能力について交通の遮断ができるだとか、特に私は医者をしておりますので、感染症の面から重要だと思います。県の防災計画は、非常に立派なものをお作りになっていますけれども、そこでもやはり感染症対策は抜けているので、僕はそこを一番強調していきたいと思っています。以上です。

【蒲島知事】

ありがとうございました。田川さん、お願いいたします。

【田川委員】

僕は州都のイメージの前に一言お話ししたいことがあります。まずは、道州制については、全国知事会が平成19年に出しているものがありまして、真の地方分権型社会を実現するには、単に広域自治体である都道府県だけの問題にとどまることなく、国と地方の役割分担を抜根的に見直すことにより、我が国統治機構全体の改革を行う必要があるということを経験的な考えとして出しております。まさに、その通りであります。民主党の政権誕生で、マニフェストでは基礎自治体を重視した分権改革を優先させる方向を打ち出しておりますけれども、その後、もう3年近くになりますが、制度設計等の具体的な考えが全く示されていない。地域主権というふうに標榜しながら、道州制を基本とした地方分権の協議が停滞してしまっています。先日、民主党の樽床(たるとこ)幹事長代行とこのホテルで協議をしたときにも、その点を私は質問をいたしました。「民主党政権になって地方分権はとどまってしまった。一体どうするつもりだ。」と言いましたら、地域主権は民主党に一丁目一番地であると言いながらも、現在ほとんど進んでいないということについて、彼は認めていました。

そういう状況の中で、二重行政を打破するというところからではありませんけれども、大阪の橋下知事が「大阪都構想」というのを打ち上げたことは、皆さま方ご存じの通りだと思います。そうかと思うと、今度は福岡の市長が、福岡市と周辺16町村で作る人口243万人の「福岡都市州構想」を立ち上げております。これは仮に道州制が導入された場合には、我々はそこから独立するのだという話です。この他、横浜、神戸など、七つの政令市の研究会が検討しているのは、これも道府県から独立させる「特別自治州構想」。実は今あちこちからそういうのが出始めておりました。政府は、これという方向性を出さない中で、それでも地方がそれぞれ勝手に動き出していて収集がつかない状態になっている。こういう状況が果たしていいのか。先ほど冒頭で申しました全国知事会の指摘は、まさに今の日本の危機を表明しているのですけれども、それがぶっ飛んでしまった。

もう一つ問題点は、それぞれの大阪都構想、福岡の都市州構想、もう一つの特別自治州構想。こういうのは、分権よりもむしろ独立して、特別な権限を与えてほしいということでもあります。全国的に地方分権を進めなければならないというのと、相当質が違います。こういうことで、皆さん分かるかと思いますが、大阪都構想が今国会で法案化の方へ向かっているのです。抜本的な地方分権というのが置き去りにされたままであります。官僚は、もうそれこそ、これで何となくお茶を濁せればいいのだという感じだと思います。

そういう状況の中で、今回このくまもと未来会議では、道州制の是非を論じるということではなくて、いきなり州都をテーマにして、しかも熊本が州都に選ばれるにはどうしたらいいのかということを経験するということだと理解しています。私は九州商工会議所連合会の副会長で、先日唐津で会議がありましたけれども、実はこの話をしましたら、シーンとなりました。各県の会長さんが僕の方を見られまして、いわゆる緊張が走ったということです。それほど、州都をテーマにというのは九州各県では今までタブー視されている。それをあえて挑戦しようということでもあります。よく各県を刺激するとか、我々は慎重に動くべきだという論議は今までずっとありました。でも、現状のままいきますと、道州制導入の話が進んでいく中で、熊本は忘れ去られて、まず順当に福岡が候補地と

なっていくでしょう。福岡が一極集中ということに気がするのであれば、次は鳥栖となる可能性があります。鳥栖と福岡というのは一体化しております。あそこは交通の要所で新幹線もありますし、高速道路が完璧に九州を縦断、横断しています。そういう状況でありますので、ここで熊本が声を挙げないと、本当に持って行かれてしまう可能性が非常に高いと思います。かつて、熊本に五高がありましたので、熊本は何もしなかった。そのときに福岡は渡辺さんという方がおられて、私財を投入して、九州大学という帝国大学を誘致した。要は、その誤りを二度とおこしてはいけないということだと思います。他県から警戒されようと何をされようと、熊本は州都を目指すのだということを高々と宣言して、そのために県民の英知を結集して突き進むという知事の考えも納得しております。熊本商工会議所でも、今週の通常総会で決定する今年度の事業計画案で、地方分権と道州制についての検討を本格的に始めます。当然その中には、州都を熊本にというのが大命題として入ってきますけれども、そういうかたちで経済界でも論議を起こしたいと言っています。

もう一つ、州都のイメージは今まで先生方がおっしゃった通りであります。まさに一言で言えば州政府が置かれるということだけであります。政治、行政の中心が熊本ということになる。つまり、まず熊本が代表する都市になるということ。それから、全世界的に見ても九州を代表する国際都市になるということでもあります。これは知事もおっしゃっておりますけれども、それによって熊本への投資が増える。当然、行政、政治の中心がここにありますと、情報を収集するがために、企業も、それから各種団体も組織も熊本に張り付くということでもあります。やっぱり「100年の礎を築く」ということでもあります。そういうものを高々に掲げていく必要があるというように思います。ポイントは、後でも申しますけれども、九州の多極分散型の開発が必要です。それと九州全体にとって何が利益かと、この2点を熊本は九州各県に訴えていく必要があるんじゃないかということです。以上です。

【事務局】

ありがとうございました。では坂東さんお願いします。

【坂東委員】

州都の問題に入る前に、私も蒲島知事の2期目のスタートを心から期待しております。お慶びするというよりも期待しております。また素晴らしい行政をしていただけるのではないかと思います。

1期目は、五百旗頭さんもご存じだと思いますけれども、東京の友人の方たちは、みんな「何で熊本に行くの？ 地方政治のどろどろとした所へ行ったら、本当にひどい目にあうんじゃないか」というふうに危ぶんでおりましたし、きっと熊本の方たちも、学者の方に知事が務まるだろうかと心配された方もいたのではないかと思います。1期が終わりますと、その実績によって名知事であるということが県民の方たちに伝わり、本当に信任されたわけです。そして新たに今度、幸福度を最大化するだけでなく実感できる、という新しい目標に向けて歩み出されるというので大変期待しております。

私は、残念ながら幸福度と言いますと、東京の人、あるいは全世界の人は熊本だとは言わないと思います。ブータンだと言っています。ブータンは、30年以上前から、これからはGNP(国民

総生産)ではなくGNH、Gross National Happiness(国民総幸福量)と言い続けておりましたので、その長さがあるということと、自分たちのポリシーというか、考え方を自信を持って打ち出し発信されているということがやはり存在感を高めているのではないかなと思いますので、是非熊本も、他の県がやっていないGNHを打ち出していきたいと思います。

川辺川ダムのようなああい問題がなくなりましたけれど、例えば具体的な全く思い付きだというところであるかもしれないんですが、小野さんの熊本大学の医学部は、熊本県民の子弟だけではなく、全国からたくさんの方が入学してくるんだらうと思います。そして、その方たちが地域に残らないでよそへ出ていくのは地域の医療水準を高めるために非常に問題だから、熊本県民の子どもにクォーター(制限)をしようなどというようなことは、よその県の医学部を持っているいろいろな大学で言われていることです。そうではなく、そこで勉強し、卒業した人が10年間は必ずこの土地に居ることを義務付ける。職業選択の自由がどうのこうのという意見はあり得るだらうと思いますが、例えば自治医大の方たちは、へき地医療を10年ということを前提に入る。初めからデクレア(declare=宣言・公表)して、それが承知の人だけ受け入れますよというようなことをおっしゃるほうが、県民の子弟を3割クォーター(制限)で絶対確保しますというよりも、全体としてお互いのハピネスは増大するのではないかな、安心した県民生活をする上でも役に立つのではないかなと思います。アジアとの連携あるいは活力を高めることにしても、「へえ、そういう手があったのか！」という新しいアイデアをどんどん発信していただきたいと思います。

前置きはこの程度にいたしまして、州都のイメージについては、先ほど五百旗頭先生がおっしゃいましたように、オランダの中ではハーグよりアムステルダムの方がずっと商業的には繁栄しておりますし、人口も多い。また、私がしばらくおりましたオーストラリアも、シドニーの方は400万人を超えるような魅力的な街なんですけれども、首都はキャンベラに置かれております。それからカナダもトロントの方がずっと経済的には盛んなんですけれども、オタワに首都が置かれております。カナダの場合もオーストラリアの場合も、それぞれ大きな勢力が首都かどちらか争った中で、真ん中の小さな都市に首府を置こうという妥協の産物で新たに作られました。たまたまちょっと文化の成熟が十分ではなく、きれいだけれども面白みのない都市だったと言って批判されております。いろいろな首都、都市のイメージがある中で、蒲島知事が「ワシントンとニューヨーク」というふう提案されているのは、とてもみなさん分かりやすいのではないかなと思います。本当にニューヨークは経済的な面ではウォール街があり世界の中心ですけれども、ワシントンはワシントンとしての政治的首都としての存在感が大変大きい。

ちょっと余談になりますが、五百旗頭先生に是非陳情したいと思ったんですけれども、復興の時に、国会と官邸だけ福島県に移したらどうかと。他の機能は全部東京に残しておいていいけれども、仮設の建物でもいいから、国会と官邸だけ移したら、日本が本気で復興する、原子力問題に取り組むぞというメッセージになるのではないかなということ考えたことがあるんです。それは全く余談で置いておきましても、やっぱりどこに首府を置くか首都を置くかというのは、政治的なメッセージの表れだと思うんですね。ですから、例えばその道州制というのが分権なんだと。要するに一極集中ではないんだと。それぞれが個性を発揮して協力していくんだ、そのための道州制なの

だと。単に国の権限を奪いましょうという道州制ではないんだと、その州の中でどういうふうな形で協力し合っていくのかという新しいイメージを作るんだ。東京にいろんな魅力を全部集中してしまうというふうな、20世紀の国づくりのイメージから多極型道州制にいくというのならば、その州の中でも一極集中ではなくそれぞれが個性的な魅力的な地域を作ることが貴重なんだということ、本当に自信を持って提案をする。それが、最大のメッセージになるではないかなという気がいたします。ですから、いろいろな州がいろいろなメッセージを発信できるだろうと思いますが、九州が発信される時には、ぜひ九州はこういうふうな形で地域連携を多極型でやっていきますと。商業・産業・経済の福岡、文化・政治の熊本、鹿児島はおそらく自然とかそういったようなことで個性を出されるとか、それぞれが自分たちの魅力をアピールするという形で全体が底上げをしていく。こういうようなことを是非提案していただきたいなと思います。

さらにアジアとの連携をどのように作っていくか。また2順目の時に具体的な話をしてご提案すべきなのかもしれませんけれども、それぞれが中国、あるいは東南アジアの国々と、東京経由ではなく直接結びつくといったような形が、いろいろな試みとしてあるのではないかと思います。

今までの立派な航空会社だけではなく、最近LCC(Low Cost Carrer=格安航空会社)ですとか、気軽に乗れるような路線に人気が集まっておりますが、例えば熊本からそうしたLCCの路線をどんどんアジア中心に開発されるとかというようなことを是非考えていただきたいなと思います。とりとめのないことばかりを言いましたが、1順目の提案をさせていただきました。

【蒲島議長】

ありがとうございました。いろんな意見が出ましたけれども、私も州都のイメージを一言言わせていただくと、ネブラスカ州というところにおりましたが、そこではオマハが一番大きな街なんです。でもオマハではなくて、リンカーンというオマハの三分の一くらいの小さな都市が州都だったんです。それで私にとっては、州都というのは大きな大都市以外の所に置くものだというふうに、ずっと思っておりますので、福岡に行くというのは最初から想定しておりませんでした。ところで、州都の話を知事会ではやらないというのが暗黙の了解だったみたいです。けれども、わたくしそれを知らなかったもんですから最初に州都の話をしました。知らないってことも大事ですよ(笑)。イベントがあるとそういう州都の話をしてきましたら、当然鳥栖も出てきましたし、それから大分市も手を挙げるようになりました。そういう州都構想をさまざまな県がやることによって九州全体の都市のレベルアップになるのかなと思っています。

それから先ほどオランダの話が出ましたけれども、九州の大きさはちょうどオランダやそしてスウェーデン、デンマークくらいだと思っています。この3つの国に特徴的なものが私は4つあると思うんです。それは、政策の革新性、2番目に福祉と成長を両立させていること、3番目に政治的信頼がとても高い、4番目に他国からとても愛されている国であると。道州制は手段であって、目的はやっぱりそういうふうな国に、あるいは道州にすべきではないかと。そういう意味ではこの4つのアプローチというのをまず熊本が率先してやることも大事なのかなと。そして道州制の州都を熊本にするというふうな動きに持っていくべきではないかと私は考えています。

それから坂東先生の前で品格の話をするとなんとも恥ずかしいんですけども、この品格というのがとても大事で、私はそれを100年の礎の中で「知の結集」と呼んでいます。世界中から日本中から知を結集するような、そういう熊本県にしたいと思っていますので、その全く最初で最もインパクトがあったのが、五百旗頭先生の招聘(しょうへい)であります。五百旗頭先生が熊本に来てくださったことによって知の結集とはこういうことかとみんな分かってくださる。そういう意味で、少しずつだけれども品格のある熊本に近づけることが、この州都への道ではないかなと思っています。

それでは1巡しましたので、もう一度五百旗頭先生の方から、州都になるために熊本の強みとか、あるいは選ばれる条件とか、そういう観点からまたお話しいただければと思います。

【五百旗頭委員】

はい。熊本、私にとって新しい地で非常に初々しく勉強しております。今、坂東先生からも世界の例が出ましたけれども、どういふ首都の定め方をしているか。こちらは州都ということで、そのアナロジーで考えられると思うんですけども、やっぱり多いのは中心都市としての基盤ができており、一極集中しているところに首都を置くというロンドン、パリ、東京がたとえでしょうか。そういうのが多いですね。東京も明治の初めは江戸時代の基盤でありましたけれども、幕府を徳川に開くときは、ある意味で戦国時代のいろいろな織物とからみつけた京都・大阪から離れるという意味もありましたね。ですから、その時には蓄積の実績に基づいて江戸に首都を置いたというのではなかったと思いますが、近代においてはロンドン、パリ、東京型の一極集中型のモデルというのがやはり多いだろうと思いますね。それに対して、先ほどからお話が出ておりますが、中心都市と政治行政の中心を分離するという型があります。ニューヨークとワシントンがそうですし、坂東先生がおっしゃったようにカナダはトロントという超巨大都市、あるいはモントリオールと違うところに置いている。オランダも同様に、アムステルダムその他大きな都市もある。オーストラリアはシドニー対メルボルンの二極の対抗の中でそれとは別のものを作るということをしたわけですが、そういう意味で、分離体制というのは、時として対抗者に対する第三者という選択でもあったかと思います。

それからやはり坂東先生がおっしゃったんですけども、首都機能を政治行政の中でも分離していく。いくつかのところに、オランダもカナダも分散させているという面があると思いますが、巨大中心都市と違えるというのと、そういうのが組み合わされているというところがあります。

話題に出なかったのが、今までも新しい国づくりをするときに、賑わっている中心地域から、その国の中心の新たなところに首都を設けるというブラジルなどの例がありますね。ワシントンもかつて人工的に作った首都だったし、キャンベラもそうで、どちらも坂東先生がおっしゃったようにどうも文化的にまだ味が良くないねと言っていましたけれども、やっぱり時間とともに非常に厚みが出てまいります。ブラジルの方はそれに比べると新興都市めいていますが、一般論で、言ってみればまだ開拓の人工的支援首都だと言われております。サンパウロやリオデジャネイロはいささか雑踏が過ぎるというほどに混み合った大都市で、いいところも悪いところもパワーがいっぱいですが、国土全体の発展を考えたら、そういう放っておいても賑わうところではなくて、中心的な位

置を占めるところにあえて新都市を作ろうというのがブラジルであります。パキスタンもカラチから北の方に移りましたし、ミャンマーも最近そういうことをやっておりますね。まったく新しい都市を作るのがいいかどうか。日本の首都移転のときには、東京でも関西でもなく新しい地に、というようなことを検討したことがありました。

古くは平城京ができたあとも、随分と都をさまよっております。平清盛の時代には兵庫もありましたし、天智天皇の時代、白村江の戦いに負けて唐と新羅の連合軍がきつと攻めてくるのではないかとということが危惧されたときには、大阪湾から狭い河内平野を越えたら敵軍が入って来る奈良盆地ではなくて、琵琶湖畔の大津に都を下げるということもやっています。しかし、例えば8世紀に入って聖武天皇の時代に随分と新首都を求めてさまよったんですが、それは大きな理由として地震などの天災が京都をしばしば襲い、戦国時代もまた京都で秀吉の作った伏見城が崩落するというようなことがあったからなんです。不思議なんですけれども、この政治的な動乱期は、日本列島の地震活動の活性期と重なることが多いんですね。戦国時代もそうでしたし、それから幕末安政年鑑にも随分やられたし、関東大震災から第二次対戦の頃もありましたが、その後戦後日本が第九条のもとで平和主義を取った時代、どういふものか不思議なことに地震活動も平穏期に入ったんですね。冷戦が終わって危機の20年だということになると、1995年に神戸地震が起こって、それが号砲一発、この度の東日本大震災に至る地震活動の活性期。不思議な社会的動乱と大自然の変調というのが列島のバイオリズムに関係することが意外なんです、それはともかくといたしまして、かつての遷都の動機として、天災、疫病というふうなものから新たな展開を求めるといふのが多かった。忌事とかいうふうな合理的理由が十分わからない時代というのはどうしてもそうなりますが、天災、疫病というのは天の為政者に対するお叱りだというふうに、儒教でも考えたし仏教でも考えたんですね。ですから聖武天皇などは、災害がたびたび起こるたびに自分の徳が足りないからこういうことが起こるんだと、天の叱りを受けるんだと考えた。だから自分は一生懸命救援活動をやり、そして減税をやり、そして恩赦を与え、徳を示してご理解いただくということを一生懸命やるんですね。もう少し今の政治もそういう面もあってもいいかと思うんですけれども。そういう思い込みというのが強い時代だったですから、都を変えるときにもそういうふうなものを動機にすることが多かった。我々の日本列島は、4つのプレートがせめぎ合い、絡み合う。その絡み合いの中で水面に上がっているのがこの日本列島。特に関東地方は4つのプレートがせめぎ合っているところなんですね。当然に地震がたびたびくる、一番頻度の高いところなんです。かつてのような忌み事という意味ではなくて、科学的、合理的に考えて首都直下地震は避けがたい。数十年に一度は避けがなくなってきた。だからまるっきり遷都せよとは言いませんが、そういう場合に大事なことは、一極集中主義で極限まで発展した日本は、それを続けていたら崩壊するという。むしろ多極化していく。中心的な個性のある誇りある街、そして州を、数個から10個作る。その間での競争、多様性の中の競争というのが、この社会全体の活力になっていく。東京を眺めてしかものを考えないというのではなく、しっかと台地に根差した新しい展開をしていくという局面に入ってきたというふうに感じております。いろんなモデルがある中で、この熊本の強み、果たしうる役割ということを考えるということが今回のテーマであり、それに私も加われることを嬉しく思っている次

第です。

【事務局】

ありがとうございました。小野先生それではどうぞ。

【小野委員】

はい。州都としてもしあるならば、熊本の強みというものをお話をさせていただきます。先般熊本日日新聞社が70周年を記念して、熊本の100年の「熊本グランドデザイン論文」を募集しましたら、県民の皆さんはものすごく関心がおありで113点集まりました。だけどその中のほとんどのキーワードが、熊本の水と農産物、農業とそれから医療を挙げておりました。先ほど坂東先生が熊本に医者が集まるぐらいになるとおっしゃったんですが、幸いなことに熊本は研修員のマッチングが非常に良くて、医者の集まりが全国の2、3番目になるそうです。非常にありがたいんですが…。

【坂東委員】

へき地は？

【小野委員】

へき地はまたちょっと別です。(笑)。恐れ入ります、へき地は別です。熊本県全体としましては大学が別枠を設けなくてもいいくらいなんですね。いずれにしても、農業と水と医療を挙げてくれました。そういう中でも私の立場は非常に狭いんですけれども、やっぱり熊本は危機管理の中核都市で、州都には、どんな派手なものよりもそれが一番大切だろうと思っていますし、そのためにはものすごく熊本は恵まれていると思います。

名前はどうでもいいんですが、中核センターとしての総合防災センターだとか危機管理センターというのは州都に必ずあるべきだと思います。それを作るためには、ちょっと繰り返しになりますが、水が豊富で九州各地に配れるだけあるじゃないですか。それを配る第8師団、自衛隊という大きな師団があるではないか。それから人口密度がそれほど高くないではないか。インフルエンザが流行っても、少し知恵を出せば行政と医療でコントロールできる可能性があるではないか。それから、JR 熊本駅が街の真ん中でなくてへき地にある。交通遮断が可能であること、それが非常に交通手段の重要なポイントになるのではないか。それからテロとかそういうことを考えると、地下鉄を我慢した価値があったのではないかと。(笑)。そんな、今デメリットと考えているところが、危機管理の中核都市として見たときには、全部よい方に判断できると私は思います。それから、比較的自然災害が少ないんですね。

さらにアジアに近いということは、アジアとの交流がものすごく盛んになる。あるいは先ほどのグランドデザインにも、釜山と熊本をリニアモーターで海の底を通ってという立派な論文が出ました。そういうふうに交流がだんだん盛んになると、それはそれで経済的な効果とかいろいろあるのです

が、もう一つは、人が行き来すると、病気も行き来するということです。

昔の歴史から考えて、病気は全部西から来ます。ほとんど西から来ます。ペストがそうでしたし、コレラがそうでしたし、インフルエンザは言わずもがなです。みんな西から来ます。そのうちに、黄砂にいろんなものが混ざって新しい病気が入ってきます。そういうことを考えますと、僕は日本の国のために、国立感染症センターが東京にあるだけではなくて、九州道を超えて考えてもやっぱり西の守り、鎮西として、危機管理センター、特に感染症センターを持つておくことが極めて重要で、その点から言うとさっき言ったように熊本にと僕は考えます。

それからもう一つは、医学部が今ちょっと国家試験が悪いとか言っていますけれども(笑)、熊本の医学部はどこにも負けないと思っています。僕はもう卒業して違う大学にいますけれども。歴史的に考えても、北里柴三郎は熊本の小国の出身です。破傷風やペスト、上海まで出かけて最初にペストの原因菌を見つけたという人です。それから、WHOの天然痘撲滅のときに、最後に撲滅の委員長になった蟻田(ありた)先生、まだお元気ですが、一国をつぶすぐらい、歴史的にはつぶしているような天然痘を撲滅した人です。それから狂犬病。今でも中国など、外国では一番恐ろしい伝染病ですが、これも天草出身の獣医さんで国会議員になって議員立法で狂犬病予防法を通した原田雪松(はらだゆきまつ)先生。昭和25年に同法が通って以来、6年経ち昭和32年以降、日本国内では狂犬病が一例も起こっていないんです。これはあまり知られていないんですけれども、行政で一つの病気をゼロにしたということで専門家の間で非常に高く評価されています。今、中国でもフィリピンでも一番怖いのは天然痘ではなくて狂犬病なんです。日本にはそれが無いという。今挙げた感染症、この三つを全部、熊本出身の学者が大きな貢献をしたということです。私は、これはもう、感染症の三巨人と呼んでいます、熊本にはそれがある。そしてその後、それに乗っかって、今熊大医学部も日本でただ一つのエイズセンターをもち、日本でエイズは熊大出身の医者がリーダーとなっています。エイズセンターが熊本にあるので、よそからいろんな一番いい学者が集まっています。そういうのが引き継がれておりますし、少し手前味噌になりますが、化血研という、2009年のパンデミックの時の国内のワクチンの45%を供給したところがあります。こういうのを兼ね備えているところに、危機管理センターを設置する。感染症センターを設置する。それが、州都につながるんです。その機能は、僕は熊本が圧倒的に強いんだと思っています。以上です。

【蒲島議長】

ありがとうございました。田川さん、お願いします。

【田川委員】

私はずっと現実的な話をしてまいりますので、すみません。よろしく願いいたします。

まず、商工会議所会頭として活動する中で、いや応なくその現実に目が行きます。州都にふさわしい要件というのを考えてみた場合、まず交通インフラ、これは絶対的なものですね。その整備が必要である。熊本が州都になるために何をすべきかというときに、九州新幹線が開通したことによって縦軸はつながりました。熊本－鹿児島間が40分、博多－熊本間が33分というのでつながっ

たんですね。今度は横軸を考えてみますと、長崎新幹線着工が決まりました。そうなりますと、長崎、佐賀、乗り継いできますと熊本県にすぐ来られる。問題は、大分、宮崎。ここをどうするかというのが非常に問題です。先日、九州商工会議所連合会の会議で宮崎の会長さんが、こういうことを言ったんですね。「熊本は冷たかもんね。延岡線ば全然気にしとらん。むしろ大分を結んだ方がよかけん、そっちばかり力を入れる。」というのを会場の中で言われてショックだったんです。結局、僕は、大分と宮崎をどうつなぐかというのを、全力を挙げてやるべきであるというふうに思っております。

先ほど小野先生もおっしゃられましたが、危機管理をする中でインフラというのは最大の要素であります。当然、危機管理だけではなくて産業から人口の交流も含めて、交通の便が良くなければ、あるいは人的交流がなければ、誰が州都になって選びますか。州都になんか選ばないんです。だから、それにまず全力をあげるべきであるということですね。そのために何をすべきかという、先ほどの宮崎の会長じゃないですけども、やっぱり実現のために、熊本が延岡線なり大分線なり、全力を挙げて先頭に立って熱心にやるということを示さなければならない。これが一番大事です。そういう意味で、知事にもぜひそれをお願いしたいし、熊本の国会議員の方、県議員の方、それから我々経済界も一緒になって動きますので、ぜひそういう機会を作っていただきたいと思っております。

もう一つは、熊本の強みというのは、皆さんもご存知のとおり、熊本は九州の中核管理都市と言われてきたんです。最近はどうも言われませんが、沢田元知事の時あたりが、まさに「熊本は九州の中核管理都市である」と言われてきました。そのとおり、国の九州を統括する出先機関が、熊本にかなりありました。それがだんだんと福岡に移動していつているという状況です。九州農政局、九州総合通信局などは、まだ残っている。九州財務局もある。それから、九州森林管理局、九州地方環境事務所、これはいずれも九州を統括する事務所ということです。これは、どんなに大分が手を挙げようと何をしようと、絶対負けない。福岡と十分対抗できる。それから、さらなる強みは陸上自衛隊西部方面隊が熊本にあるということですね。その他、民間では、九州を統括する支店はだいたい福岡が多いんですけども、それでも熊本は、南九州を統括する支店がほとんどあります。そういう意味からすると、本当に要件としては十分そろっているということではないかと思っております。

それから、これはある人から指摘されたんですが、幸いにしてあまり開発されていない熊本平野ですね。海に面した平野で、これくらい広大な土地を持っているところは、全国ほとんどないと言われました。九州で見えていますと、特にそう思います。しかも、内海に面していますので津波に強い。よほど、雲仙の普賢岳が噴火しない限りは、ここはまず大丈夫で、津波はこないだろうというように思います。しかも、広大な土地がありますので、どんなことでも可能であるということです。もちろん、これは九州のど真ん中にある。それから熊本市は100%地下水に恵まれている。それから治安に恵まれている。それから、発言がありませんでしたが、世界の阿蘇の玄関口であるということですね。これは、国内はもとより、今後東アジアを含め、熊本を売り込む最大のポイントだと思いますけれども、そういう力が抜群に熊本にはあるんです。それから、医療の集積度、技術レベル、

これはもう世界レベルにあるということ。それから大学が集積をしている。今、熊本に3万人の大学生がおりまして、地方で3万人の学生というのは本当に珍しいんですね。五百旗頭先生も熊本においでいただきましたが、知事は知の集積を行おうとしています。それから、全国有数の農業大国である。危機管理も含めてこれも優秀である。それから歴史と文化、これは他県に全く引けを取らず、それ以上であるということ。

そういうことも含めて、熊本は十分州都となる要件は揃えています。でも、手をこまねいていたら、先ほども申しましたように、みんな暗黙の了解で福岡と思っているんですね。それを何もしないでいると、本当に福岡になってしまうんです。ただ、各県の人たちと話すと、福岡は九州の長男なんです。みんなやっぱ、一定の敬意を長男に対しては払います。しかし、本当のことはあまり言わない。これ以上、長男が大きくなって一極集中してもらおうと困るというのを、実はみんな内心では思っている。そういう意味では、僕は、熊本は次男坊だと思います。次男坊というのは、割と勝手気ままに動けて、相手も心を許して何でもしゃべってくれる。熊本というのは、そういうところにある。これを使わない手はないと思います。いわゆる次男坊だからということで近親感を持てるという、この強み。長男ではない強み、次男であるという強みをいかに発揮するかというのが、今後、いろんな水面下なり、あるいは各県と折衝する中で、非常に有効であるというように思います。

次男坊として何をするかというと、例えば、九州知事会もそうだと思いますけれども、事務局は持ち回りでしょうか。ほとんどが、だいたい福岡に事務局があります。それをこっちで全部いただくんです。これは大変な労力がいると思うんですが、事務局を次男坊がやりましょう。長男は大変でしょうからということで、それを受ける。これはどういうことが出てくるかということ、必ずそこにすごい人脈ができるだろうし、各県との熊本に対する、それこそ尊敬ですね。「いつもすみませんね。忙しくて迷惑をかけてごめんなさい。熊本のおかげでこうなりましたよ。」ということを書いていただく。そういう役割を熊本は担う。事務局的な役割を、ぜひやりましょうということです。

それから、先ほど五百旗頭先生がおっしゃられましたけれども、非常に残念なのは、昨年大震災が発生して、当然僕は、日本の東京一極集中がこれでいいのかという論議が国内で起こるかと思ったら、全く起きないですね。僕は、こんな国はないという気がします。先ほども言われました首都直下型が、テレビであれほど報道されているのに、国会議員も含めて真剣になって首都を分散するという論議が出てこないことに、日本国民って一体何だろうかというふうに思っております。そういうことからして、もし仮にあの程度の地震、津波が東京を直撃したら、もう日本が立ち上がれない。国家としての存在がなくなってしまうという気がします。そういうところをどうするか。幸いこの委員会に五百旗頭先生もいらっしゃいます。坂東先生もいらっしゃる。御厨先生もいらっしゃいます。姜尚中先生もいらっしゃいます。日本のそうそうたる政治学者がずらりと揃っている。これは州都を考える委員会であります。「う」を取りましょうということも、ちょっと考えてもいいんじゃないかと。州都の「う」です。首都。つまり、私たちは首都分散も目指してもいいんじゃないか。当然、州都を目指しますけれども、その先には、いわゆる首都を分散するために、日本の中で分散した首都、いわゆる省庁をいくつかは熊本に呼ぶとかですね、そういうところも当然考えていくべきではないか。それこそ100年の大計なので、それぐらい考えてもいいんじゃないかと。少なくとも、蒲島知事

がそう言われても、誰も驚かないと思うんですね。みんなが「州都は熊本だ」とお互い言わないということでタブーにしていたのに、それをぱっと言ってしまふ。ところが今度は「州都を考える委員会を立ち上げます。」と言うと、本当にみんなびっくりしていますけれども、蒲島知事だからみんな許容するんですね。知事はそんな人柄を持っていらっしゃる方で、だったら今度は日本も首都を分散して、そのうち熊本に一角を占めましょうと言っても、文句を言う人はいないのではと思っています。それぐらい、我々は考えていいのではないかという気がしています。

もう一つ、商工会議所や僕のホテルで、物事を発想するときに、熊本という限定した考え方はやめましょうというのを言っています。物事を全て九州の中で考えようということですね。九州として考えてみた場合に、熊本は今何をすべきかというのは自然と浮かび上がってきます。熊本の中にだけ閉じこもって考えるより、物事は全部九州の中で私たちは考えるという大きな考えを持つということが、将来州都になるときに相当生きてくるといいますし、それぞれのビジネスチャンスも生まれてくるということです。サッカーではないんですけれども、シュートを打たないと点が入りません(笑)。それが一つ。もう一つは、野球に例えますと、シュートだけでは打者を抑えることができません。ストレートもカーブも必要だし。そういうのを使い分けながらではないと、相手は倒せない。いわゆる複合的な、戦略を立てて取り組んでいく必要がある。また、取り組んでいくだけの価値があるというふうに思っています。

【蒲島議長】

ありがとうございました。では、坂東さんお願いします。

【坂東委員】

私も熊本の強みと弱みで、強みで言おうと思っていたことを、全部、田川さんがおっしゃいましたので、改めて強みについては申し上げません。本当に、農産物にしろ水にしろ、お城を中心とした伝統にしろ、五高以来の教育、人材の輩出、強みはたくさん持っていると思うんですが、私はあえて弱みについてお話をさせていただきます。やはり熊本が州都として選ばれるには、まだ皆さんのモメンタム(勢い)が高まっていないというように思います。来る前に、この熊本の将来の姿に関する調査報告書をいただきましたので拝見しましたら、熊本を州都にということについて、県民の方たちがまだ「本当にそんなことができるの」と疑っていらして、「福岡じゃないの」と思っている。県民の方たちがそう思っているらと、やっぱりこれは実現しないのではないかと思います。オリンピックもみんながイスタンブールじゃないかと言ってありますが、それでは東京も難しいんじゃないかと思います。

自分たちが一番州都としてふさわしいんだと思えるような雰囲気を作るには、どうすればいいんだろうか。それはやはり知事が、あるいは県庁の方々が、これはどういう意味があるんだということを、もちろん情報としては提供をされているんだろうと思いますけれども、県民の方たちに自分で考えていただく。そのためのプラットホームといいますか、いろいろな機会を作って、TED (Technology Entertainment Design)ではないですけども、プレゼンテーションをしていただく。反

対も含めて、自分たちはこういうような地域の未来を作りたいんだ、考えているんだということを、若い方とか働き盛りの方とか、女性とかそういう方たちに、TEDの場合は15分なので、15分プレゼンテーションをしてもらおう。そういったような機会を作られると、本当にどうすればいいんだろうと、きっと県民の方たちが当事者意識を持って考えてくださるんじゃないかと思います。「偉い人の考える話」、「リーダーが考えていればそれでいいですよ、私とは関係がありません」というのではなく、この州都をきっかけとして、地域の未来をどうしたいんだということを自分たちが考えていただくような機会を、ぜひ知事に作っていただけるといいなと思います。その中で、きっと「それは無理だよ」「こいつならやれる」など、本当に考えもしなかったようないろいろなアイデアというのが湧いてくるのではないかなと思います。

昔、日本の霞が関がいろいろな情報を集めていて、これを上意下達じゃないですけども、地方に分散するということが可能だった時代もありますけれども、今は全くそうではなくて、現場にいる人が一番強いんだ、現場の人がいろいろなことを一番考えているんだ、地域で生活している人たちが自分たちの地域の未来をどうしたいか、本当に考えてもらうところから提案というものは出てくるのではないかなと思います。ぜひ現場力を、現場のアイデアを生かすような場を作っていただきたいと思います。もちろん政令市熊本が、州都というときには一番当事者になれるのだろうと思いますけれども、熊本市とその周辺の方たち、それから熊本が州都になるかもしれないけれど、自分たちのところはかえって忘れられるのではないかなと心配される方もいるかもしれませんので、熊本市以外の地域の方たちも含めて、ぜひご自分の問題として考えていただけるといいなと思います。

それから二つ目も、これは弱点というか、もう少し皆さんたちが発信をなさるとのこと。先ほど、地域で自分たちのアイデアをディスカッションする場が必要だと申しましたが、地域の中だけではなく、外へ出て発信をしていただくということが大事なのではないかなと思います。私、先週たまたま用がありまして、沖縄、那覇へ行っただけです。長い間沖縄の方たちはいろいろな経緯もあって、コンプレックスもあって、東京へ出ていらして「出身地はどちらですか。」と聞かれても、「沖縄です。」とあまりストレートに答えられなくて、「九州のあたりです。」とかそういうふうにぼかしてしまうというようなメンタリティーだったんだけど、この10年足らずの間に、非常に沖縄の人たちが自信を持つようになってきた。自分を信じられるということを喜んで、誇らしげに発言をするようになってきた。これは安室奈美恵のせいかもしれません。宮里藍さんのせいかもしれません。あるいは沖縄サミットのせいかもしれませんが、もちろん、政治的に防衛の基地問題などは全然解決されていないんですけども。住んでいる県民の方たちが自分たちの強みを意識して、そこで発言をなさる。それこそ先ほど、自慢するというのではなく、物静かな自信を持つというふうなお話がありましたけれども、自分たちが熊本出身であるということをもっと誇って、「やっぱり九州の州都熊本というのは、こういういいところがあるんですよ」ということを、外から発言していただく。出身の方たちは、本当にいろいろな場で活躍されておりますので、そういうような方たち、あるいは生まれ育った方だけではなく、転勤や何かで熊本で働いておられてご縁のある方たち、いろいろな縁のある方たちを全部サポーターとして、外から揺さぶる、外から発言をしてもらおうというような仕組み

も、とてもよいのではないかと思います。

それから、知の発信について、先ほど五百旗頭先生が県立大学に来られたというのも一つのきっかけになるかなと思うんです。私も小さな大学の学長をしておりますけれど、今、大学業界は18歳人口がどんどん減っていく中で、いかにして優秀な学生を確保するかというのでしのぎを削っております。おそらく東大は心配はあまりないのだろうと思うのですが、普通の私立は本当に大変です。でもその中で、今、秋田県立の国際教養大学が日本中から人を集めております。定員100人でスタートして、今度は170人、200人を目指す。一学年そのくらいの小さな大学ですが、入学者をとことん勉強させてアメリカの大学生に劣らないほど勉強させる。一定の水準に達しなかったら落第させる。留学するのを義務化しているんですが、留学するまでにTOEICで何点取らなければならないというような形でプレッシャーをかけたら、結構勉強する。本当に片田舎なんですね(笑)。実は私も見学に行ったんですけど、本当に片田舎でスーパーマーケットも車で10分ぐらい行かなければいけないとかという状況です。アルバイトもできない、ひたすら勉強しかすることがないというような環境を作っている。私立の大学ですと、授業料を払っている親御さんから、落第させたら「お前のところは教育指導がなっていない」と怒られたりするもので、なかなかやりにくいんですけども、県立大学ならば、それが可能なのではないかなと思います。ぜひこの機会に、全ての分野で一流をということではなく一点集中型というか、この分野に関しては、とてもすごいポイントがあるんだよというような大学をお作りになるというのも、知の発信として非常に効果があるのではないかなと思います。

それから、もうすでに国際展示場、あるいは国際会議、そういったことをいろいろ努力をされていると思いますけれども、実は国際会議とか国際展示、見本市なんていうのは器だけあってもしょうがないんですね。やっぱり、いかにセールスをするとか、いかにそういう人脈を作って人を連れてくるかということが大事です。そのネットワークを構築するというのは一朝一夕にはなかなかいかないと思いますけれども、地域をはじめ、先ほど申しました熊本出身のとても有能な方たち、発信力のある方たちが、国際的な展示や国際会議とかそういったものを熊本で開こうよと引っ張ってくれる。別に大カンファレンスじゃなくて、たとえ100人の会議でも300人の会議でも、国際会議を引っ張ってきた人にはご褒美をあげるとかです(笑)。そういったようなことを、いろいろ工夫なさって、中でだけ議論するのではなく、熊本の良さを外の方たちにどんどん発信していただくというような仕組み作りが大事です。リーダー、オーガナイザーの力量を発揮される、期待される分野だと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

【蒲島議長】

ありがとうございました。時間がだいぶ迫ってきましたけれど、これだけはしゃべっておきたいということがあれば今、自由にどうぞ。

【五百旗頭委員】

皆さんの発言に大変教えられたと思うんですが、一つの熊本県の出せる強みは、総合安全保障

だと思っんですね。総合安全保障の研究会というのができたのは大平内閣のときです。国民が何かにおびやかされる、それを阻止するのが安全保障ですけども、何によって日本はおびやかされるのかというのは三つある。一つは国防ですね。これは伝統的なものです。外国に攻められて国を滅ぼされたら、築いてきたもの、経済生活も文化も何でもなくなってしまう。

二番目。しかし日本を殺すには、実は武器はいらない。1973年の石油危機では「日本に石油を売らないぞ」と言っただけでパニックになってしまったんですね。自ら資源を持たないこの国は、そういうことをやられたらおしまい、考えてみたら真珠湾があった1941年も石油全面禁輸をやられて、これが3年続けば日本は完全に死ぬと。戦争をしなくても、蛇口が止まってしまって死ぬので「必死」だ。それに比べれば、万が一にかけて真珠湾攻撃というふうに傾いてしまったわけですね。その意味では資源を閉められるという、経済資源の安全保障というのは、劣らず大事だ。その経験に基づいて、総合安全保障の二番目は国防について経済面です。

三つ目は大災害から国民を守るというふうに、研究会は柱を立てたわけですね。それをもっと大事にしてあげればよかったと思うのですが、残念ながら日本のリーダーシップは後追いパッチワークが多いのです。実感を持って、国民が、メディアがわっと騒がなければできないんですね。その時になって、いよいよ道州制になったから、大急ぎで州都はどうするのだということになりがちなんです。あらかじめしっかりと考えて、戦略的に対処するということがなかなかできない国民柄なのです。大災害ということをして3本の柱にしていながら、それに十分注意しなかったことによって、神戸の、東日本の大変な咎を受けた。その3つが大平内閣のときの定義なのですが、それに加えて今では「人間の安全保障」という観点が付け加えられるべきだと思うのです。この点で先ほど小野先生がおっしゃったように、熊本大学にはエイズに対するセンターがあるのだろう。国立感染症センターは、東京だけでなく西の防疫である熊本に作るべきだというのは、非常に意義深い提案だと思うんですね。人間の安全保障という観点に立ったら、熊本こそが大事な前線の柱だ。国防については先ほどから指摘があるように、西部方面総監がある。国防、東シナ海の安全というのが、尖閣事案以来、非常にリアルなものとなってまいりました。その問題を対処する最前線である。実は東日本大震災が起こったときに、陸上自衛隊は全国から、橋とトンネルがつながっているの、東北に向かって殺到したわけですね。当時の火箱陸上幕僚長は5分後にそれぞれの方面総監に、「みんな走る用意をせよ。」と電話をしました。「まもなく統合幕僚長から指令が来るが、それが来てから準備ではだめ。今すぐ準備をしなさい。ただし、熊本の第8師団の戦闘部隊は動いてはならない。」と指示がありました。なぜならば国防ということをおぼろげにするわけにはいかない。その言葉にいかにかこの地が国防という意味で重要かということが示されているのです。しかし、「生活支援部隊は支援に行く用意をせよ」ということだったと聞いております。国防の面ではそういうことあります。

そして経済エネルギーという面については、これは全国で分担しておりますけれども、食料安全保障の拠点都市ということで、この地は非常に大きな意味を持つ。それから原発が難しいというときに地熱発電ということは、阿蘇の地に合って非常に有効である。やるべきことがあるということ。そして大災害に対しては、この地は先ほどから話があるように相対的に安全性が高く、そして

支援する能力が豊かである。これを単にそういうふうな状況があるというだけではなくて、もしそういうことが起こった場合にはどういうふうにあるかというのを考えてみると、もちろん西部方面総監は、隷下の部隊を直ちに動かすでしょう。しかしそれだけを待っているのではなくて、県としても、たとえば阿蘇くまもと空港周辺にしっかりしたデポ(depot)を持つ。九州、どこで災害が起こっても直ちにそこから物を持っていける体制を作っておく。もっと言えば、アジアは最も災害の頻度の高いところ。アジア、四国に起こった場合に、それを支援するときに「みなさんいろいろ寄付してください。」と言う必要もない。まず初動においてデポがあるということは非常に大事で、東日本大震災であれほど各国にお世話になった後、日本の国としてはいわば課題になってきているのです。それについて、熊本の地が日本の中でアジアに近いという重要な地理的条件を基にしてそういうことを言うべきではないか。起こった場合にどうするというプランが、行政として自衛隊も合わせて実際にあるということが非常に大事だと思います。

先ほど田川さんのほうから東京に行って間もなく、動かないというご指摘がありました。実は全くそうとも言えずに、民間の企業とかでやっぱり東京は少し腰がグラグラし始めている、出ることを考えているところがあるんです。出るとしたらどこへ行こうか。円高の高コスト構造の日本ではなくて、外国に行けば、空洞化があります。それは別として、国内でという場合に、東京で二眼力というのなら当然関西でしょうというふうに思って、そういう流れができかけたところで止まっているんです。どうしてか。この夏は関西こそ一番電力が不足する。またさらにダーツと原発が並んでいて全部止まっている。そういうところへ行って私は大丈夫かという不安、疑念があるわけです。もし橋下市長がやる人であるのなら、「原発再開はいけません」と言うだけではなく、「たくさんある原発の中で、確かに危ないものがあります。しかし世界の水準から見て、ここここは、これが危ない。」と言ったら、世界のどこでもできないほどしっかりした原子炉だということで、ABCでランク付けをする。同時に、その立地している場所に津波が来たら、直下型地震が来たらどうかという問題についてABCでランク付けする。危ないものは、住民のことを考えて絶対にOKは出さない。しかしここここは大丈夫ですよ、これがだめということはどうしても原理主義になってしまいますよということ。もちろん完全に安全というのはこの世の中ありません。原発の場合は特にそのリスクは0にはならない。しかし、原理主義になってはだめです。これからの経済活動を世界の中で日本がやっていく上で、基盤を失うというところまでやってはいけません。そういう意味で安全性を厳しく問いながら、ここは大丈夫だからしっかりと東京の受け皿を引き受けるという姿勢を示せば、東京のほうの地が浮きかけているものの受け皿になるのですが、それが実はできない。熊本には非常に立派な総合安全保障、人間の安全保障を含めた基盤があり、広々とした大地があるというので、ぜひ頑張るべきではないかというふうに思う次第です。

【蒲島知事】

ありがとうございます。今日はたくさんの方々が聞きに来てくださっていますので、質問を受けたいと思いますが、その前に小野先生、何か一言おっしゃりたいことをどうぞ。

【小野委員】

私はもうですね危機管理センターの名前まで決めていきます(笑)。第五高等学校の生徒だった寺田寅彦が「天災は忘れたころにやってくる」といいますので、「寅彦センター」というのを作ってほしいなと(笑)。今がチャンスですね。五百旗頭先生が一番高いところから指導していただいて、蒲島知事の肝入りで県警におられた吉村さんがこの危機管理で県に入っていたというように、人材が揃った今ですよ、と私は思っています。早くしないとよそにもっていかれるといけませんので、それを強調しておきたいと思います。

【蒲島知事】

では傍聴の方から何か質問があればぜひ手を挙げてください。

【質問者1】

ご質問というよりもお願いがあって手を挙げさせてもらいました。「熊本グランドデザイン」の募集に応募させてもらい、その中でも書いたんですけど、熊本は文化と芸術というものが少し遅れているのではないかというのが、僕の中では残念なことです。せっかく細川家の文化財とかがあるのに、九州国立博物館は福岡にあるというのがとても残念です。州都を目指す中での品格というのはとても大事になってくると思うので、熊本にある貴重な文化・芸術というものを前面に出した州都構想、熊本構想をしていただきたいというふうに思います。本日はありがとうございました。

【蒲島知事】

ありがとうございました。蒲島県政の大きな柱の中で、加藤・細川家の歴史と文化を守り、磨くがあります。その上にまた文化を作り上げるというもので、例えば熊本駅の広場は建築学界のノーベル賞と言われているプリツカー賞受賞者の西沢立衛(にしざわりゆうえ)さんの作なんです。それとやはりプリツカー賞をもらった安藤忠雄さんによる駅舎もできます。だから、少しずつではありますけれども、私の代でもそういう文化を作り上げてきた。この州都構想もそういうものの一つだと思っています。

忘れる前に、坂東さんが先ほどアンケート調査の結果を紹介されましたけれども、それは平成21年度。それ以降でだいぶ変わっているのではないかと考えています。

他にありませんでしょうか。どうぞ。

【質問者2】

知事にお尋ねしたいと思います。

知事は州都構想を考えておられますが、これに対する人材の育成はどんなふうに考えておられますか。お尋ねします。

【蒲島知事】

人材育成、これはとても大事なものと考えています。例えば今、時習館構想というものをしています。教育委員会という組織がありますので、教育長のもとにある組織(公立学校)とはなかなかダイレクトには政策ができないのですけれども、知事部局が所管しています私立高校としては、かつての細川藩校の時習館にならい、時習館構想というものを今始めています。そして私立高校のレベルアップを図ることによって熊本県全体のレベルアップを計りたい。私は、1期目では塾長を務めておりましたが、次に私の代わりに五百旗頭先生に塾長になっていただき、私は時習館の館長ということで二人で頑張ってやっていきたいなと思っております。

そういうことで、人材育成は、もともと教育にタッチしていたものですから、とても大事だと考えております。五百旗頭先生を呼んだのもその一環でありまして、県立大学の理事長というかたちで関与していただきたいなと思っております。どうぞ。

【坂東委員】

お話が終わっていないところで申し訳ありません。私は人材育成のほうでぜひ知事に陳情しようかと思っていたアイデアがあるのですが、今ここで話ししてもいいですか。

実は昭和女子大学では、昨年から社会人メンター(人生の師)募集ということをしていただいております。学生たちはどうしても世間のことを知りません。自分の親とか友達とか、すごく狭い世界の中で生きているので、もうすでに社会で仕事をしていらっしゃる方、活動していらっしゃる方にメンターに登録していただいて相談相手になっていただく。それによって、「あ、じゃあ自分は学生のうちにもっと勉強しないとイケない」とか、「こんなことをやらなくてはイケない」なんていうような刺激を受けて、とてもいい効果を上げているのですが、その大学の中の人だけで学生を教育するよりも、外にいる人が緩やかにそういう協力をしてくれるというのはすごく別の効果がある。もちろん大学の中の人、しっかり基礎的なことは教育しなければいけないのですけれども、人間的に育てるというような点では、学校の外にいる人たちのいろいろな協力の仕方というのがあり得るのではないかと思います。私どもは私立大学で大都市の中なので、なかなかそういったようなことはやりにくいのですけれども。例えば今、熊本の子どもたちの学力はいいだろうと思いますけれども、日本人は一般的には記事でみられるようにどんどん学力が低下していますよね。普通の子だけを相手にしてはだめで、特別によくできる子と特別に問題のある人たちというのを学校の先生に全部面倒を見ろと言っても無理だと思うので、それを外の人、志のある人たちが応援するような仕組み。学校の教壇の中でそういう人たちを入れるとなると教育委員会側とか、学校教育法がどんなだというような話になりますので、学童保育の変形版でもいいと思うのです。外側にその基軸というか、地域の方たちが人格形成をみんなに応援するというような仕組みを、意識改革はできないので全県は無理でも、どこかの町か村から始めていただけると、きっとみんなこぞって次の世代を育てようではないかと思います。人材育成にすごく役に立つのではないかと思います。ちょっと州都とは関係のない発言をしてしまいました。

【蒲島知事】

はい。

【質問者3】

菊陽町から来た者です。私は菊陽町にはもう35年くらい住んでいますけど、つくづくやっぱり菊陽町の住民として考えた場合、事なかれ主義というのが非常に多いみたいな感じです。やはり日本全体がそうだと思うのですが。この前、田川さんが熊日か何かに、外国の場合、田舎の学生はディベート力か何かと書いておられたと思うのですが、その辺がどうも熊本の者は「もうそのくらいのことはよかたい。」と言って、あまり論議しないのです。それで腹には持っているのですが、表には出さない。だからもう少し、そういうディスカッションを思いきってやっていかないと、こういうふうな州都の問題があったら、非常に県民の力というのは大きいと思うのです。これは行政だけでは絶対だめだと思います。だからそういう点でその辺をもう少し推進してほしいというふうな気持ちになります。以上です。

【蒲島知事】

ありがとうございます。それではご意見として伺わせていただきます。

【質問者4】

道州制を導入した場合に、国の機関委任事務はどうなるのでしょうか。

【蒲島知事】

すみません、もう一度。どなたでもいいのですか。

【質問者4】

知事に。

【蒲島知事】

道州制というのは、国の役割とそれから地方の役割を明確に区分しなくてははいけません。だから外交であるとか軍事であるとかそういうものは国に残し、そしてもう少し生活に関わるものは道州制の中の政府がやっていく。明快な区分というのは、この段階ではまだ完全にはできておりませんけれども、そういう役割分担を間違えると、あまり道州制の効果は現れてこないのかなと思っています。道州制の大きな問題というのは、財源の配分をどうするか。例えば東京は、相当財源が豊かですから、それを道州にどういうふうに配分するかという問題が、機関の問題よりも多分一番大きな問題になってくるかもしれません。それが今、九州で知事さんがみんなで合意しているのは、九州広域行政機構というところで、国の機関、特に出先機関を丸ごと引き受けようという、そういう動きをしています。そういう道州制になる前に、それをやる形での予行演習と言ったらおかしいのですが、それを受け入れたときのいろんな問題が生じるかもしれませんが、そういうものを検討

した段階で、より明快な役割分担がこれから国との機関で出てくるのではないかと考えています。

それではもう一人だけよろしいですか。ではどうぞ。

【質問者5】

画図のほうで米作りをやっています。熊本の素晴らしさをいっぱい教えていただいたので、非常に自信も持てたのですが、その中で農業という部分では非常に私としては危機を感じているのです。本当に小規模農家ばかりでなかなか規模拡大はできないということで、規模拡大の方向ですっと国として指導された。ただ2、3年前に知事のほうに提案書を出させていただいたことがあるんですけども、農業というのは、ただ規模拡大さえすれば、アメリカ式みたいにやれば、ポジティブにやれるかというものではないと思うのです。日本の昔からの有畜農業といって、畜産とか作物等々合わせたもので、やはりある程度の規模は必要なんです。実際の話、規模が小さすぎます。だからある程度は規模は必要ですけども、それを大規模化してしまうと、今度は逆に公害を生んでしまう恐れが非常に多いのです。畜産にしても五十歩百歩となっていくともう排泄物はすべて産業廃棄物になってしまう。それを本当に有効に活かすにはもっと小規模で、各農家が昔みたいにある程度の規模でやっていけば、もっと循環型のものができてくるので、やはり日本というか熊本的方式というものを、ぜひ目標を持ってほしい。そして若い人たちにもっと広く新しい農業のあり方というか方法を実践させていくという方向へ行くと、若者がどんどんそういう農業の魅力にひかれて入ってくるのではないかと思います。実際の話、今のままではもうほとんど後継者がいません。ですから、農業の方は是非そういう方向へ方向転換を、上のほうから右向け右ではないんですけど、方向付けをしていただくと早いのではないかと思います。

【蒲島知事】

ありがとうございます。ご提案として聞かせていただきます。熊本は、私はとてもバランスのよくとれた農業ではないかと思います。畜産で、ものすごく大規模化すると、おっしゃるように、様々な問題が起きてきます。そういう意味では農政の、そういう大規模化というよりも、こういう持続可能な農業。一つ私が熊本で成功したと思うのは、これまで飼料を外国から買ってきていましたけれども、せっかく遊休農地があるので、そこに飼料用の米を植えてもらって、それを牛や豚に食べさせる、あるいは鶏に食べさせるという。それが最も成功した例だと思うのです。そしてそれで畜産も餌も賄うことができるし、それからそういう畜産の糞尿もうまい具合に処理できるのではないかと考えています。そういう持続可能な農業、大規模化だけが私はいいい農業だとは思っていません。そういうふうな観点で取り組んでいますけれども、今日は貴重な意見をいただき、県庁の職員も沢山来ておりますので、ぜひそのところを考慮してほしいと思います。

すみません。皆さんのご意見をもっとお伺いしたいのですけれども、もう時間がせまっておりますので、これでこの会議を締めさせてもらいたいと考えています。委員の皆様方には、長時間にわたり有意義な議論をしていただき、誠にありがとうございました。今日のご意見によって次の構想を考えるにあたり、欠かせないような議論をいただきました。そこで皆さんのご意見を取りまとめて州都構想づくりを進めたいと思っておりますので、できればこの会議を基に、企画部長を部会長とす

る部会を設置して作業を進めたいと思っています。今日いただいた議論を基に、また次へと議論を展開するというのに部会が必要ではないかと思っていますので、それを設置したいと思っています。

また次回は、今日の論点を踏まえて、さらに州都を目指すうえで熊本がなすべきことについて具体的な議論を進めていきたいと思っています。もう日にちは決まっていますか。

【司会】

調整中です。

【蒲島知事】

調整中ですか。

それではいよいよ皆様方長時間ありがとうございます。議事録は県のホームページに後ほど掲載させていただきたいと思います。

それでは委員の皆様から先に退席させていただきます。

【司会】

それでは今日の議事録を、後日県のホームページに掲載していきたいと思います。皆様ご協力ありがとうございました。